

《もくじ》

- 特集:東京電力福島第一原発の過酷事故から12年
- 2頁・福島原発事故の一段面～311子ども甲状腺がん裁判
……………河合 弘之(弁護士)
- 4頁・福島における甲状腺がんの多発～過剰診断という虚構
……………崎山 比早子(3・11甲状腺がん子ども基金)
- 6頁・つなげる想い～絵筆が深めた人間交流
……………志田 弘子(「じやり道工房」主宰)

奔流

《第31号》

- 発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL 042-381-7770
- 発行人・高橋 洋一(共同代表)
- 編集人・矢間秀次郎(事務局長)
- 干振替・00120-0-710488

題字揮毫・梅原猛

大河の一滴 (31)

照射した「日本の核開発」に浮遊する狂気と科学

戦争による唯一の被爆国が「原発大国」の矛盾

保阪 正康(作家)



太平洋戦争の戦時下で、日本も密かにウラン爆弾の開発に取り組んでいたこ

を起こし、それが次々と連鎖反応を生み爆発して、膨大なエネルギーが生み出されてくることがわかり、それを兵器化したいと考えた。折から戦争の時代に入ろうとしていた。

とは今では多くの人が知っている。陸軍は兵器行政本部と航空本部が理学研究所の仁科芳雄研究室に、海軍は艦政本部が京都帝大の荒勝文策研究室に依頼していた。この「依頼」の意味がなかなか複雑な問題を含んでいた。

この発見が、特にヒトラーの側で兵器化され、戦争で用いられたらというので、アメリカがアインシュタインなどの要請をいれ、マンハッタン計画に踏み切ったことは歴史的事実であった。何しろウラン235はウラン原石の0・7%しかないのだから、爆弾にするには相当なウラン原石が必要だったのである。

かつて私は、仁科研究室の二号研究と荒勝研究室のF号研究の内実を調べて書として刊行したことがあった。その折に原子物理学者を始めとする科学者や陸海軍の技術将校にも数多く会った。技術将校はむしろ軍の意向を受けて、その実現を図るべく科学者に命令を伝える。しかし科学者の側はそういう命令通りに研究開発ができるわけではない。陸軍の技術将校は、1930年代にヨーロッパの原子物理学者が、ウラン235に中性子を当てると核分裂

技術将校や陸軍の軍事指導者などは、研究や開発の手がかりを仁科に求めた。仁科は製造開発などとも無理と二線を引いていた。海軍もそれと同じで、研究だけにとどめたいとの了解事項があった。

ところが昭和19年(1944)7月にサイパンが陥落して、日本の敗戦は次第に明確になってきた。すると軍事指導部の将官クラスが、理研に乗り込ん

できたというのだ。理研に席を置いていた原子物理学者に向かって、一刻も早くウラン爆弾を作れ、とサーベルを抜かんばかりにして脅迫したというエピソードが残されている。サイパンを奪回するために、そのウラン爆弾を使うんだとどなりまくったというのであった。さらに科学者たちに、「お前たちは勤皇精神がないのか」とも詰め寄っている。

この話を紹介してくれた原子物理学者は、彼ら軍人は爆弾がどのようなものかを全くわかっていないと呆れた表情で語っていた。ウラン爆弾の製造を国を挙げて国民が一体となって、進めなくてよかった、サイパンに投下などしていたら日本の科学者は世界から相手にされないだろうとも漏らしていた。

アメリカでもマンハッタン計画に組み込まれていた物理学者は、広島、長崎への投下後は大体が戦後は反核運動に献身している。日本でも二号研究やF号研究に名を連ねた科学者たちのほとんどは反核運動に入っている。彼らの中の1人はウラン爆弾の威力を確認して、科学者は悪魔の下僕にもなりうる、と実感したとつぶやいていた。

●主な著書

- ①『日本原爆開発秘録』新潮社、②『昭和陸軍の研究(上下)』朝日新聞出版、③『昭和史 七つの謎』講談社。